

飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

第 260 回 時代のニーズ！「ソーシャル・アントレプレナー」

2008.6.1

小生、幾つかのNPOに関わっている。NPO (Non-Profit Organization)、日本語で特定非営利活動法人と訳されるが、営利追求を目的とする株式会社等の法人とは異なり、非営利、つまり儲けてはいけない団体と思われている感が強い。ボランティア精神の元、弁当持ち寄りで汗を流すのがNPOだと思っている人が多い。

そんな背景からか、多くのNPOが運営上、財政難で困っている。高邁な目的に向かい走り出したのはいいが、その目的を達成する前に、収入不足、経費増のあおりを受け、途中で断念せざるを得ないNPOも、幾つも存在してきた。

しかしそれは、本末転倒と考える。もちろん経費をかけずに、社会貢献するやり方もあろう。でも多くの社会貢献事業は、やればやるほどコストがかかるものだと思っている。目的を達成するのが本来の使命のはず。お金がかかるから活動を断念する…というのは、何としてももったいない話であり、そもそも、運営自体が無計画すぎる。

そんな発想から、最近我国でも「社会起業家」(ソーシャル・アントレプレナー Social Entrepreneur)の考え方が注目されてきた。フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』によると、社会起業家とは、社会変革の担い手として、社会の課題を、事業により解決する人のことを言う。社会問題を認識し、社会変革を起こすために、ベンチャー企業を創造、組織化、経営するために、起業という手法を採るものを指す。

社会起業家により行われる事業は、社会的企業(ソーシャル・エンタープライズ、Social Enterprise)と表現されている。営利企業の起業家は、典型的には儲けと自分にどの程度報酬があったかで、その実績を計るのに対し、社会起業家は、社会にどれだけの強い効果を与えたかを成功したかどうかの尺度にしている。NPOや市民グループを通して働きかけを行うことが多いが、この分野で働く人は、企業や政府のセクターで働く人が多い。自ら団体・会社を始める人でも、組織内にあって改革を起こす人でも、いずれもありとされる。

かつては街づくりといえば、役所と商店街・商工会議所、そして学識経験者といわれる人達だけでプランニングされてきた。それが如何に、斬新さに欠け、話題性を持たず、画一的で、何ら効果を挙げないまま、ずいぶん永い時を経過させてしまった。その反省からこの分野でも大きな新連携が望まれている。産・学・官に加え、一般市民、NPO、市民活動団体等ボランティア、さらに主婦や学生まで、街づくりに参画しようとしている。

ここで実は、大変重要なポイントがある。舞台だけ作って、新体制による〇〇協議会を発足したとしても、私は「元の木阿弥」だと思っている。そこに全体の収支を計画・管理し、人に関する統制とコーディネートを実施し、永続的運営を実践させる営業業務を担うべき「社会起業家」の存在が、不可欠と考える。これこそが街を変え、社会を変えるキーマン、チェンジメーカーだと思っている。世の中、混沌とした今こそ、「社会起業家」の存在は、時代のニーズといえるのかもしれない。